

児童福祉施設で生活する子どもを支援する人々の意識に関する研究

－「より良い支援」の在り方とは－

仲井勝巳

坂口真康

1 研究目的

本研究では、児童福祉施設で生活する子ども（外国籍を含む）を支援する人々の内、施設職員とボランティアに着目し、彼／彼女らの支援に関する意識を明らかにすることを目的とした。そして、そのような目的の先には、児童福祉施設の子どもの「より良い支援」を考案するというねらいがあった。

本研究では、児童福祉施設関連の先行研究の内、特に坪井・三後（2011）に着目した。その理由は、同研究では、実証的研究により児童福祉施設職員の子どもへの対応に関する意識の探索が行われているという点で、本研究の土台となると考えられるからである。坪井・三後（2011）の研究では、児童福祉施設の若手職員が子どもに対応する際に感じている困難を明らかにするために、11名の若手職員を対象としたインタビュー調査が行われた。そこでは、同職員は、虐待を受けた子どもに特徴的な「感情と異なる行動」への対応に困難を感じていることや、「力関係に敏感」な子どもたちの攻撃性の対象になる傾向があることが指摘された（p. 45）。そして、同研究では、そのような結果を踏まえ、施設職員が力関係の問題に巻き込まれないためには、職員同士の連携・共通理解とケアワークの専門性を向上させることの重要性が示された（p. 45）。

本研究では、坪井・三後（2011）を土台としつつも、ボランティアや若年層以外の職員も調査対象にすることで、同研究では取り上げてこなかった支援形態や年齢層を考慮しつつ、児童福祉施設での子どもの支援活動に従事する人々の意識を明らかにすることとする。そしてその際、本研究では、施設職員とボランティアの認識の異同を探索することもねらいとする。

2 研究方法

本研究は、質問紙調査とインタビュー調査を手法として採用した（調査協力者については、個人情報保護のため仮名を使用）。具体的には、第1に、日本国内にある児童福祉施設A（以下、施設A）において、主に乳幼児から高校生までの子ども（条件次第では18歳以上も含む）と関わる常勤と非常勤の施設職員（以下、S）17名（20代～60代）と、日本国内の様々な児童福祉施設で支援活動を行うボランティア団体B（以下、団体B）に所属するボランティア（以下、V）6名（10代～40代）の、合計23名に質問紙調査を実施した（2019年11月～2020年1月に実施）。施設Aと団体Bにおいては、研究代表者（仲井）がボランティアとして支援活動しつつ調査を行った。第2に、2019年11月に施設Aの代表X氏に、2019年11月と2020年2月に団体B代表のY氏に、インタビュー調査（半構造化面接）を実施した（いずれも1時間程度）。なお、上述の調査の際には、研究代表者兼調査者（仲井）が研究・調査の説明を充分に行い、研究・調査協力者の承諾・同意を得た（本研究は、大阪総合保育大学研究倫理審査委員会（承認番号：児保研－30）の承認を得ている）。

本研究では、以上の質問紙調査とインタビュー調査の結果から、児童福祉施設で支援者として従事している人々の支援に関わる意識を分析・考察する。その上で、支援活動従事者が子どもと関わる際に気をつけている点などを明らかにしつつ、どのような観点が児童福祉施設における子どもの支援において重視されているのかなどを探索する。そして、最終的には、「より良い支援」を考案する際に参照することができるような観点の提示を試みる。

3 結果と分析・考察

第1に、質問紙調査の主要な結果をもとに児童福祉施設で子どもを支援する人々の意識を概観する(単純集計結果の解釈の際には、施設Aや団体Bの支援活動従事者の全体の人数と比較すると本研究の対象者の人数が少数である点に留意する必要があるが、支援活動従事者の意識を概観する際の参考にはできるだろう)。なお本研究では、質問紙調査の自由記述の回答に焦点を当て、それらの中でも「子どもに重点」が置かれた記述と「子ども以外に(も)重点」が置かれた記述の観点から、象徴的なものに着目した分析・考察を行う。

まず、「支援活動(仕事)をして、やりがいはあると思いますか」(【やりがい】)の問いに、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した者は、それぞれ16名、6名、1名であった(「そう思わない」は回答者0名)。さらに、同質問項目に「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答した者の自由記述の回答(22名分)を整理すると、子どもの成長や施設職員との協働に関する記述等が見られた。具体的には、「子どもの成長に寄り添って成長を感じられること」(S②)や「子ども一人ひとりの欲求(ニーズ)に応じて関わりができること」(V⑤)等の記述(以上「子どもに重点」)や、「子どものできることが増え、成長を間近で見ることができたときや、子どもがよりよい環境で過ごせるために職員間で話し合い、次に繋げていく一端を担えることにやりがいがあります」(S⑰)、「子どもの行動を観察したり、職員さんから差し支えない範囲で子どもについて情報をもらったりすることによって、子どもの特性や背景を理解し、それに応じて子ども一人ひとりへの対応を工夫し、よりよい支援ができたと感じられること」(V⑤)等の記述(以上「子ども以外に(も)重点」)が見られた。

次に、「支援活動(仕事)をして、良かったと思いますか」(【達成意欲】)の問いに、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した者は、それぞれ16名と7名であった(「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」は回答者0名)。さら

に、同質問項目に「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答した者の自由記述の回答(22名分)を整理すると、前述の【やりがい】と重複する内容も見られたが、子どものみならず、支援者自身の成長に関する記述等が見られた。具体的には、「子ども達と楽しく過ごせている時」(S⑨)、「子どもたちの成長を間近に感じられる。子どもたちの人間関係が築ける」(V⑥)等の記述(以上「子どもに重点」)や、「勉強になる仕事だと感じているから」(S④)、「子どもから元気をもらえて、それが自分の生活に張り合いを与えてくれるから」(V⑤)等の記述(以上「子ども以外に(も)重点」)が見られた。

また、「支援活動(仕事)をして、困ったことはありませんでしたか」(【困ったこと】)の問いに、「よくあった」、「どちらかといえばあった」、「どちらかといえばなかった」と回答した者は、それぞれ12名、6名、5名であった(「全くなかった」は回答者0名)。さらに、同質問項目に「よくあった」または「どちらかといえばあった」と回答した者の自由記述の回答(18名分)を整理すると、子どもの指導や支援に関する記述や施設職員との連携に関する記述等が見られた。具体的には、「子どもに対しての指導について困ることが多いです」(S⑬)、「子供たちのお願いに対し(例えばスマホを貸して等)どこまで応えていいものかと悩んだ事がありました」(V③)等の記述(以上「子どもに重点」)や、「チームとしての連携の難しさ」(S⑩)、「人手が足りない、と感じることが多く、もっと多くの職員で普段はより個別に困難な場面ではチームワークで子供達に関わることであれば良いと思います」(S⑮)、「施設職員さんとの関わり。外部の人間がボランティアとしてくるのは、実習生と違い扱いにくく思われている気がします」(V①)、「子どもの特性に応じてどのように対応すればよいのかを職員さんから教えてもらう機会がないこと」(V⑤)等の記述(以上「子ども以外に(も)重点」)が見られた。

加えて、「子ども達と関わる時に、気をつけていることがありましたら、お教えてください」という問いへの自由記述の回答(23名分)を整理すると、子どもと

丁寧に接することの重要性等に関する記述等が見られた。具体的には、「言葉のつかい方に気をつけている」(S⑧)、「できるだけ平等に」(S⑨)「きちんと話を聞くことを意識しています。また1対1の時間も大切にしています」(S⑬)、「怒りません。でも価値観や考え方は伝えます」(V①)、「走り回る子供がいるので、怪我をしないようしっかり目を配る」(V②)、「ボランティアとのかかわりを求めている子どもには、できるだけ均等にかかわるように努め、不公平感を感じさせないようにすること」(V⑤)等の記述(いずれも「子どもに重点」)である。

さらに、「初めてあるいは初心者段階の支援者が子ども達へ関わる場合は、どのような関わり方や意識を持つことが大切だと思いますか」という問いへの自由記述の回答(22名分)を整理すると、子どもの支援に困った際に先輩職員に相談することの大切さなどに関する記述等が見られた。具体的には、「あまり深く考えすぎず、自分の直感を大切に子どもたちと関わることと思います。そのかわり、困ったり悩んだりしたらすぐ先輩に相談すること」(S④)、「子どもの気持ちに寄り添って関われるよう意識することや子どもも大人のことをよく見ているので、見本となる行動をすること、子どもの対応で困った際は、先輩職員に相談することが大切だと考えています」(S⑰)等の記述(以上「子ども以外に(も)重点」)や、「集団生活で過ごす子ども達はどうしても一人当たりが構ってもらえる時間が少なくなりますので、あっちこっちから呼ばれます。そんな時に一人一人に必ずアクションしてあげてください」(V①)、「まずは肩の力を抜いて、自然体で寄り添っていくこと」(V②)等の記述(以上「子どもに重点」)が見られた。

以上に示した質問紙調査の自由記述の分析結果については、次の点を特筆することができる。それは、第1に、施設職員もボランティアも、子どもの支援活動の際に、子どもとの関わりのみにやりがい、達成意欲や困難を感じているのではなく、子ども以外との関わりについてもやりがい等を感じている側面があるという点である。具体的には、施設職員との協働という点で、施設職員とボランティアの両方からやりがい

や困難さを感じている側面が見えてきた—これは、坪井・三後(2011)で職員同士の連携の重要性が指摘されてきた点とも関連する側面であるといえる。第2に、施設職員については、「仕事」としての自身の成長に達成意欲が感じられている側面が見られた一方で、ボランティアは、自身の成長に達成意欲が感じられている側面は見られたものの、「仕事」という認識が抱かれている側面は見えてこなかったという点が特筆できる。これは、施設職員とボランティアの支援形態による認識の違いと推察することもできるため、坪井・三後(2011)の研究とは異なる支援活動従事者を取り上げたことにより浮上してきた点であるとも考えられる—本推論は、今後ともより詳細に検討する必要がある。

第2に、インタビュー調査の主要な結果についてまとめる。はじめに、施設A代表のX氏とのインタビュー調査をもとにした分析結果の主要な点を整理する。同調査を通じては、まず、施設Aと子どもが通う学校との連携が重視されている様子が見受けられた。例えば、新年度に新転任の学校教員(近隣の学校で勤務)が施設見学に訪れ、子どもの生活を知ること、学級(学校)経営に生かせるような情報を共有している様子がうかがえた。一方で、施設と学校との連携における困難の様相も浮かび上がってきた。例えば、「学校との連携で困ったことがありますか」と尋ねた際に、X氏からは、問題行動があったことを学校に伝えると、決定していた子どもの進路が取り消されたという事例が提示された。以上のようなX氏の認識からは、施設と学校との連携においては、進路が課題の1つとして存在することが指摘できる。このことを踏まえると、今後は施設と学校との連携を促進する要因を探索しつつ、そのような困難を可能な限り回避できるような解決策を模索することが必要になるといえるだろう。

次に、「より良い支援の在り方とは何か」の話題を提示しつつ、ボランティア団体Bの代表Y氏に行ったインタビュー調査の分析結果(2回の調査の分析結果をまとめて提示する)の主要な点をまとめる。具体的には、「子どもとの関わり方(初心者段階での関わ

り方に関しても含む」と「ボランティアと施設職員との関わり方」に関する議論の結果について、次の点を特筆することができる。Y氏からは、初心者段階のボランティアは、施設の仕組みや子どもの様子を知ること、子どものことをかわいそうと思わないことや、自然体で身近にいるような子どもとして接するように心がけることが重要であるという見解が示された。さらに、Y氏からは、笑顔で丁寧な言葉をつかうこと、平等に接する姿勢を持つこと、1対1で話したり遊んだりすることで、子どもとの信頼関係が築かれるとより良い成長へとつながりやすくなるという見解や、子どもにものをあげないことや、服装に気をつけることが重要であるという見解が示された。

一方で、Y氏より、困ったこととして、小学校高学年から中高年生ぐらいになると、「ボランティアいじめ」（例えば、ボランティアを睨んだり無視したり、筆記用具を取ったりするなど）があることが示され、その理由の1つとして、子どもが寂しいという気持ちを有している可能性があるという見解が示された—さらにY氏からは、人の物を勝手に触らないという常識、マナーを理解させるために、カバンや服などのチャックを子どもが開け閉めして、遊んでしまうことを注意することも大切であるという見解も示された。なお、このような行動は、坪井・三後（2011）の研究で指摘された、若手職員が子どもの攻撃対象になる傾向と類似しているといえるだろう。同研究では、職員同士の連携・共通理解を向上させることの重要性等が指摘されていたが、本研究の推論を踏まえると、これはボランティアにも該当すると考えられる。

4 まとめと今後の課題

本研究では、児童福祉施設において子どもの支援に従事する人々（施設職員とボランティア）の支援に関する意識を分析・考察した。そこでは主に、施設職員もボランティアも、施設職員との協働が、子どもの支援活動の鍵となるという認識を抱いている一方で、施設職員といかに協働するかに困難さがあ

るという認識を抱いている様子等が見えてきた。また、子どもの支援を議論する際には、施設内の職員の連携のみならず、学校との連携をも考慮する必要性が浮かび上がってきた。

このような結果を踏まえつつ、「より良い支援」について考えると、例えば次の点が提示できるだろう。すなわち、子どもの支援に従事する人々が子どもの支援に関する困難を感じた際に、関係者（機関）との連携（支援体制／方法の相談等も含む）が促進されるような仕組みづくりのための議論が重要となるという点である。そしてその際、支援従事者が、支援実施施設や支援対象となる子どもの理解（背景情報等の把握等）をも促進できるような仕組みを考案することも重要になるといえる—その際、本研究で浮かび上がっていた、初心者段階の支援者が気をつける点等の記述も参考になるであろう。

今後は、参与観察等を踏まえた児童福祉施設内の実際のやりとりをもとに、本研究で導き出した推論を裏付けるための分析・考察を行う必要がある—その際、支援従事者の背景情報を踏まえた探索も必要である。また、今回、調査した施設Aは、地域での歴史がある施設であったが、今後は、地域での歴史がそれほどない施設にも対象を広げた議論を重ねることが必要だといえる。

【付記】

本研究にご協力いただいた皆様にお礼申し上げます。

【参考文献】

- 佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる—』、新曜社。
- 坪井裕子、三後美紀（2011）「児童福祉施設における子どもへの対応に関する若手職員へのインタビューの分析」、『人間と教育』、2巻 pp. 45-59。
- 箕浦康子（1999）『フィールドワークの技法と実際—マイクログラフイー入門—』、ミネルヴァ書房。